

## 第三回 召命担当者の集い

### — 年齢枠を超えた人の召命と識別 — まとめ

2016年4月29日（金曜日）～30日（土曜日）  
カトリック麴町聖イグナチオ教会  
ヨゼフホール・マリア聖堂

カトリック召命チーム  
<http://c-v-team.com>

第三回『召命担当者の集い』  
《年齢枠を超えた人の召命と識別》

日時：2016年4月29（金）-30（土）  
場所：麹町聖イグナチオ教会、ヨゼフホール・マリア聖堂

2016年4月29日（金）

- 9:15：受付開始  
10:00：開会・祈り・挨拶・基調講演オリエンテーション（質問用紙配布）  
10:20：基調講演「年齢枠を超えた人の召命の可能性」・Sr.松宮留美子（C.N.D）  
11:10：特別講演「教会法的視点から見る年齢枠を超えた人の召命の可能性と問題点」  
・田中昇師（教会法・東京教区）  
12:00：休憩（昼食）  
13:15：質問に答えて  
13:45：オリエンテーション（分かち合いへ向けて）・移動  
14:00：グループ別話し合い①：「年齢枠を超えた人の召命の可能性」  
15:00：休憩  
15:15：グループ別話し合い②：「召命を活性化するために何が必要か・どんな協力が必要か」  
16:00：まとめ提出  
16:15：最後の祈り・片付け

2016年4月30日（土）

- 9:00 受付  
9:20 オリエンテーション（始めの祈り・お知らせ等）  
9:30 パネルディスカッション：『召命の識別』  
教区司祭養成：牧山強美師（カトリック神学院前院長）  
男子修道会：住田省悟師（イエズス会修練院）  
女子修道会：Sr.岩井慶子（聖心会）  
司会：大山悟（日本カトリック神学院）  
10:30 質問用紙への書き込み  
10:45 休憩  
11:00 質疑応答・意見交換  
11:30 グループ別話し合い・グループ別まとめ  
12:30 参加アンケート作成  
12:40 マリア聖堂へ移動  
13:00 感謝のミサ・まとめと挨拶

参加者総数

		そのうち 29日、30日の両日参加者：78名
29日	教区担当……………7名（司祭4.修3）	教区担当……………7名
	男子修道者・司祭…13名	男子修道者・司祭…12名
	女子修道者……………60名	女子修道者……………56名
	信徒……………8名 合計 88名	信徒……………3名
30日	教区担当……………7名（司祭4.修3）	
	男子修道者・司祭…16名	
	女子修道者……………67名	
	信徒……………8名 合計 98名	

基調講演『年齢枠を超えた人の召命の可能性』 Sr. 松宮るみ子(C.N.D)

DVD から

- ・自分たちの共同体（バルチモアのカルメル会）についての自覚と反省
- ・自分たちが最も大切にしていること・神との親しい交わり。
- ・バルチモアのカルメル会は現代人に何を提供できるか・
  - ・それまで召命がないということは、もう現代人はカルメル会の靈性に魅力がない、得るものがないと思っていた。
  - ・しかし現代人も観想的面に触れたいと思っていることを知った・自分たちのあり方への自信を持てるようになった。
- ・自分たちに最も大切なものを、価値あるものを、時間をかけて見極める作業を行った。
- ・入会、退会が繰り返される現実がある。
  - ・会の伝統を大切にしながらも、新しい入会者を受け入れ、育て、居着かせる「創造的アイデア」が必要。

①計画・夢を描く

- ・自分たちが本当に望んでいることは話し合う。夢を語る。
- ・「思い通りにいかない」と限界を感じても、その限界を超えて、夢を描く
  - ・夢を追うとき、見えてくる限界が何か、恐れ、不安、心配、避けていることが何かを考える
  - ・どうしてもあきらめられない夢が何かなどを考えた。こうして新しい目標が見えてきた。
  - ・夢を見て、困難な限界線を越えるためにどうしたらよいか・このことへの気づきが大切。
  - ・夢を描くことがなければ、自己変革、創造的であることはできない。
- ・その目標（夢）の実現について考えた・方策、財源、人材、力量など
  - ・不可能なことではあっても、どうしたら可能となるか、達成できるかななどを夢みる。
  - ・どの夢を優先するべきかを考えた。5～10年かけて実現できる夢を考えた。
    - ・「計画的に進めて必ず実現したい夢を特定する。

②戦略の確認

- ・会の自覚・会のアイデンティティは堅固であり、高く評価されてきた。
- ・しかし入会者がいなく、あと5-10年、入会者がいないなら、終える以外にない。猶予は5年～10年だけ。
- ・生き延びるには、今しかない。

③実行計画・異(多)世代共同体への奮闘

- ・若い会員は40代後半が一人50代後半が二人・もし今、25歳の入会者があつたら年齢差のために、居着けないだろうと感じた。
- ・ゆえにまず40代の会員を2-3人募集する事から始めた・次に35-40代の会員募集・次に30-35の会員募集を行った。
- ・こうして若い会員が入りやすい環境を作るよう心がけた。

④計画実行、共同体を巻き込んで

- ・キャリアのある人を、快く受け入れるために、共同体は何が必要かを考えた。
- ・若い経験豊かな入会者を受け入れ得る共同体作りを試みた。
  - ・世代毎に話し合った。75-90のグループ、中間グループ、若いグループ。
  - ・入会者にどのような貢献ができるか。どのように貢献するべきかを話し合い、大きな紙に貸しだし、さらに全体会で話し合った。
    - ・75-90グループは知恵と深い関わりができると考えた。
    - ・中間グループ・会の伝統を伝える、すべてを教えるが一番犠牲が要求される。
  - ・この話し合いを通して、共同体自体が深い靈的刷新を行った。
- ・新入会者、共同体について語る。
  - ・シスターたちは謙遜で、模範である。入会者を大切に、信愛の情で包んでくださる。神中

心の生活に対する誠実さも素晴らしい。

- ・自分の質問に答えてくれる。大きな社会像の中でいかに祈るかを考えさせてくれる。人間の地平線を越えて、物事を見せてくれた。愛の共同体の深まりに魅力を感じる。
- ・人間として真の価値を証しするものを求めていた。それがここに得られる。
- ・すべてを神に焦点を合わせている。そのことに魅力を感じる。

#### ⑤計画の実行

- ・この刷新に取り組んで8年。6名の新しい入会者を得た。すべてのシスターが変容した。

#### ⑥具体的実行・告知知らせること

- ・自分の会、共同体を知らせ、良い共同体、人を導く共同体として知られること。

#### ⑦実行・招くこと

- ・共同体のミサに老若男女が与れるように招く。そのミサが喜び、平和、非暴力の雰囲気溢れ、お互いに愛し合う共同体であること。

#### ⑧実行・「週末に来て、見てください」プログラムの開始

- ・年に一度、週末体験入会プログラムを実施。祈り、沈黙、共同体の仕事、交わりを体験させる。
- ・インターネットなどで参加を募る。

#### \*新しい企画

- ・男女を問わず、いかに祈り、瞑想するのかを一週おきのペースで、修道院で実施する夢がある。
  - ・人々の瞑想のお手伝いをしたい。今の時代に瞑想はとても大切だからである。
- ・大学性に関わる会員がいる・新しいプログラムが生まれる。

#### ⑨学んだ事

- ・新しい入会者を迎えるためにどのくらいの犠牲を払わねばならないか分からない。
- ・第二バチカン公会議の刷新の時期はもう終わった。
  - ・今は具体的な新しさ、異なった犠牲が求められている。
  - ・第二バチカン公会議後、修道会は活力ある成長期に入った。自己養成、教育、自己実現を含むものであった。強い組織中心から個人に重きを置いた生活に変化することが要求された。アパートに住む。シスターが一人で暮らす。2・3人で共同生活をする事など。
- ・会の再生は長いスパンで考えること
  - ・新しい入会希望者を入れようとすると種々の問題が生じる。種々の経済的問題を生じる。
  - ・夢、希望に神の働きを信頼して進むべき。
- ・入会希望者の多くはキャリアウーマンであった。
  - ・入会しなくても教会のため、社会のために働いた人たち。
  - ・彼女らが入会希望する理由の一つは「共同体」である。
  - ・入会する女性を養成するために、正当なことを犠牲に出来る共同体、それが修道生活の生き方のモデルを与えることになる。共同体が変わり得ないなら、新しい入会者が来てもすぐに去って行く。

#### ⑩共同生活についての入会者の証言

- ・高齢修道者の生き方は、修道生活の模範と感じ感謝している。
- ・平和で真理に満ちた修道会共同体は、理想的な社会の姿であり、社会の真の縮図であり、これは社会の光となる。
- ・もてなしの共同体でなければ、入会者は入らない。
- ・共同体は人に変容をもたらす瞑想により支えられるものである。
- ・共同体は一つの心で冒険をするところである。
- ・共同体は誰もが、新しい入会者を丁寧に受け入れ、導き、教えてくれる。

#### ⑪共同体の犠牲

- ・新しい入会者を受け入れることは容易ではない。
  - ・25年、30年、40年、50年と一緒に生活し、常に新しいメンバーを入れていく。そのために

自分たちが守ってきた場所を譲らなければならない。新しい入会者のために新しい場所を提供するために、共同体は犠牲が求められる。

- ・新しい人が入ってくると、雰囲気が変わる、静けさが失われる。
- ・新しい人に仕事を譲ることが求められる。
- ・共同体のメンバーが霊的深さに生きることが求められる。

### 特別講演『教会法的視点から見る年齢枠を超えた人の召命の可能性と問題点』

- ・教会法はしぼるためではなく、人を生かすためにある。
- ・その全生涯をキリストと教会のために奉獻する司祭・修道者が育って欲しい。そのために教会法はある。
- ・結婚経験者でもその結婚の無効宣言がなされ、その結婚が解消されるなら、司祭、修道者になる可能性はある。
  - ・そのためにはその結婚がなぜ破綻に至ったのかも良くしらべる必要がある。
  - ・養成者は結婚とその解消の傷を癒やし、回復し、完全なる奉獻に自分を委ね得るか識別し見極めることである。強い信仰と祈りができる人であるかを見分けること。
- ・有効な結婚をしていたとしても、相手が別人と生活している場合、死別して居る場合など、様々なケースがあるが、教区裁判所に相談してほしい。教会は信仰を守るという視点から考えるので、前の結婚の絆を解く場合がありえるからである。
- ・今まで、経験がないことだから、受け入れは容易ではない。しかしこれは修道会にとっても一つの挑戦である。
- ・召命において下限はあるが上限はない。年齢枠を超えた既婚経験者を入会させたことが、吉とでるか、凶と出るかは、それぞれのケースにおいて異なる。
- ・召命は強制や洗脳、暗示によって導くのではなく、愛と自由によってなされていくものである。

### 基調講演・特別講演の質問に答えて

#### \*DVD『希望に満ちた未来』をみて・Sr.松宮への質問

- ・年齢枠を超えた人を迎えるため、具体的にどうしているのか。
  - ・識別をどうするか
    - ・識別視点：明るい人、聴くことの出来る人・共同体全体で考えること。
    - ・2年ぐらい共同生活をしながら、その人・志願者をよく見る。
      - ・2年すぎたら必ず会員になれるとは限らない。そのため50歳過ぎると仕事への復職も難しい。
  - ・年齢枠の限界とは
    - ・30歳～50歳ぐらいまで。50歳を過ぎると、養成が難しくなるようだ。
- ・養成担当者に関して
  - ・志願者より年齢が下の場合、高齢の修道者の存在が重要となる。その母親のごとき姿が年齢枠を超えた人を包み、前に進む力を与える。
- ・DVDを見てマイナスの反応を示す人はいないか。
  - ・観想修道会(DVD内容)と活動修道会は異なっていたが、何度かDVDを見ている内に共通するものがあると分かってきた。
  - ・今、自分たちの会も、会の再生を行っている。今まで志願者は誰も居なかったが、二人の人が入会を望み一人は去ったが・
- ・老若に共通する魅力について

- ・修道者が重要と思うもの、大切に思うもの、魅力あるものを、若者たちも同じように魅力を感じている。
- ・若者たちとどのように接点を持つか
  - ・今や教会、学校、施設などでもシスターが高齢化し存在感はない。若者たちとの接点は持ちにくい状況にある。
  - ・DVD では修道会のミサに人々を招き、もてなし、その中から志願者も生まれていた。
  - ・若者たちの中に入っていくこと。ワールドユースデイ、ジャパンユースデイ、はつど(東京での若者の集まり)など、若者たちが集まっている。その中に勇気を持って入っていくこと。

#### \* 教会法

- ・かつて不法、不正な肉体関係をもっていた人の場合の召命について。
  - ・過去のあり方から完全に切れ、神への深い信仰と全面的自己奉獻を行う意志を持つ場合、
  - ・ゆるしの秘跡を受け、罪がゆるされるなら・可能性はある。
- ・墮胎を行った経験のある人の召命について
  - ・墮胎を行った人のみならず、墮胎をおこなわせた人も破門制裁を受けることになっている。女性側だけが罪となるわけではない。
  - ・墮胎した人は破門制裁を受ける程の重罪を犯しているが、日本においては、司教を通して、司祭たちに墮胎の罪における破門制裁を解く特別権能が与えられている。
  - ・ゆえに赦しの秘跡に与り、赦しを受けることで、この点に関しての入会の障害は解決していると思われる。
- ・洗礼を受ける前に民法上の結婚と離婚をしていた人が入会を望む場合、
  - ・結婚絆が残っていると考えられるので、教会からその絆の解消を受け無効宣言を得ることが必要。
  - ・詳しいことは教会裁判所に相談すること。聖座の恩典を大いに利用して欲しい。
- ・夫婦で修道会に入会を望む場合
  - ・もっとも深い絆は夫婦であるから、その夫婦の絆を教会が解消させることはしない。
  - ・夫婦であっても、修道院的生活はできるので、家庭で聖なる生活を送るように霊性を支えるとよい。
- ・教会法による結婚の解消などの種々の手続きはどのくらいかかるのか
  - ・約三ヶ月はかかると思った方がよい。

#### 『年齢枠を超えた人の召命の可能性』の分かち合い

##### ①自分の教区・修道会での召命の現状はどうか

- ・修道会の現状
  - ・平均年齢が高く、若い会員を養成できないので「消える」ことを考えている。
    - ・養成できるシスターがいない。平均年齢は 80 歳。
  - ・若い志願者があったが、会員は高齢者なので、耐えられず去って行った。
  - ・年齢差が 20 歳ぐらいあるので、価値観がことなり、また若者たちに接する接点が分からない。
- ・召命の現状
  - ・志願者が多い修道会では 7 名いる(ベトナム人)。修練者が日本人 3 名、ベトナム人 4 名の所もある。ベトナム人志願者が多い。
  - ・多くの修道会が 35 歳という年齢枠を設けている。40 歳のところもある。しかしこれからもう少し年齢枠を広げ、挑戦してみたいと考えている修道会もある。
  - ・神学生、志願者が数人いるが、増加しそうではない。
  - ・最近、50 歳代の人の初誓願があったが、それまでの道程は困難だった。その他にも二人の外国人志願者がいる。
  - ・若干名の志願者、修練者がいる。
  - ・召命黙想会などを行っても来てもらえない。

- ・精神的に病んだ人がしばしば問い合わせてくる。
- ・50代の人が二人、入会を希望したがどちらも続かなかった。
- ・学生志願者がすっかり減り、大人の召命に力を入れているが難しい。高年齢者や洗礼が遅い人の養成は難しい。大人で召命の道に入ると、聞かない、心を開かないケースが多い。
- ・召命活動と養成者
  - ・人材が少ないので召命活動、養成にじっくり取り組めない。
  - ・召命チームを作り共同体に「祈りの集い」や「種々の企画」を要請している修道会がある。
- ・教会の現状
  - ・教会に来る人は高齢者であり、若者や子供がいない。
    - ・子供が教会に行きたくても、親が行かせない現実がある。
  - ・日本人の召命は少ない。ベトナム人は多い。
  - ・教会全体が高齢化している。信者が増えていない。
  - ・幼児洗礼者が継続的に育てられていないのが残念
  - ・信仰の喜びが伝わっていない。
- ・若者たちの現状
  - ・ネットワークミーティングに集う若者は霊的に深いものをもっている。
  - ・長崎教区は若者が減って、集まり自体ができない。
  - ・召命を考えていても、それに応えるために修道会との接点がない。
  - ・シスターのボランティア活動に刺激されて入会を希望している人がいる。

## ②自分の教区・修道会での年齢枠を超えた人の必要性がありますか

- ・使徒職の可能性がなくなってきているので、若者との接点がなくなっている。それでも若者が神との個人的関わりを大切にできるような導き方をするべき。
- ・年齢枠を超えた召命は当然のことである。全面的奉獻を望むか否かが大切なこと
- ・修道会の中での年齢のギャップがあるので、良い人ならば40代、50代の人の入会は可能である。しかし単なる穴埋め的な入会は望ましくない。識別を正しく行うべきである。
- ・召命は必要ですが、年齢枠を超えた人である必要はない。
- ・現在の会員の平均年齢73歳。会憲では35歳までとしているが、本当に召しだしがあれば超えてもよい。
- ・様々な年代のバランスが必要
- ・その年齢でないと、召命を受けられない年齢がある。アブラハムとサムエルのように。

## ③自分の教区・修道会で、年齢枠を超えた人を受け入れる困難さは何ですか

- ・識別の問題
  - ・司祭になりたいと修道会から移ってきてても、教区司祭になりたいのか、修道会司祭でありたいのかはつきりせず、叙階されても上手くいかず病気になる人もいる。年齢枠の問題ではなく識別の問題である。
- ・病んでいる人
  - ・病んでいる人が入会を希望する。あるいは神学院への入学を希望する。修道会のホームページを見て入会を希望する人の90%が精神的に病んでいる人である。
  - ・若くても自分を捨てられない人がいる。年齢の問題ではない。生活の安定を求めて召命の道を求めてくる人が多い。
  - ・精神的に病んでいる人が入会を希望する場合、容易に拒否するのではなく、癒しの可能性を探るべきではないか。しかし容易には癒やしはできない。
  - ・辛い体験をした入会希望者を受け入れる力量が、修道会にない場合がある。
- ・若者の召命
  - ・学生が共に生活しているが、学生は縛られたくないようだ。ボランティアなどに自由に参加したい希望を持っている。
  - ・成人の召命はここ7~8年誰もいない。

- ・若すぎて挫折を知らない人も難しい。すぐに泣いたり、ふてくされたりする。
  - ・日本人ばかりではなく、外国人の召命も枠を超えて考えるべき。
  - ・若者が多くいる共同体でも、すでにグループができあがり、なかなかその中に入れない。
- ・養成者と被養成者の関係
    - ・年齢が近いと難しい。素直に聞いてもらえない。
    - ・キャリアを持つ年齢枠を超えた人を養成できる人がいない。
    - ・一人っ子だったりすると格差を感じ、養成は難しくなる。自分の気持ちを示さない。
- ・年齢枠を超えた人の召命の難しさ
    - ・頑固さ
      - ・35歳を超えると養成は難しくなる。40歳を超えた人は自分を変えることが出来なかった。
      - ・修練はフィリピンで行うが、自己表現する事のチャレンジが必要なので、自分を変えることは容易ではないだろう。
      - ・社会的な地位、キャリアを確立した人はそれを折ることが難しい。
      - ・相手に聴くゆとり、自分を捨てる覚悟ができていないか、忍耐力を持ち合わせているか
      - ・上長者に向き合い、心を開かない人がいる・・・かつての親子関係の問題が出ている。
      - ・入会希望者が謙遜であれば、何歳であっても問題ない。
      - ・それまでの生き方、価値観に固まっていて、修道院の生活の仕方に耳をかさない。
      - ・保身に徹し、共同体の生活に交われない人がいる。
  - ・能力の高さが共同体を壊す
    - ・年齢を重ねた入会希望は、しばしば有能で、人間的に厳しさを持つ。その場合、時として、共同体の他の高齢姉妹への批判が厳しくなり、共同体が硬直化し、共同体の相互関係が壊れることがある。
  - ・入会の動機
    - ・自己実現を求めて修道会への入会を希望している人がいる・・・修道会の望みに合わせ得ない人。
    - ・入会の動機が不純な人がいる。それを識別していくことが困難。どうその不純さを気づかせるか。
    - ・老後の安定を求めているようだ。共同生活ができない。神とのつながりが心もとない。
    - ・何故、これまで独身であったか、また入会希望の動機を確認すべき。
    - ・修道会を出た神学生には、なぜ退会したのか、確認が必要。
    - ・自分が司祭・修道者になりたいではなく、主が呼んでいるからという意識になること。
    - ・召命は **doing** ではなく **being** である。召命は損得ではない。
    - ・「キリストのために」という動機が、厳しい修練を耐えるために不可欠。
    - ・入会動機が不純でも、のちに「命をかけてイエスに従う」という意識に変われば OK
  - ・人間的未熟さ
    - ・言われたことのみをする。自分で考えて、積極的に物事に取り組むことができない。
    - ・奉獻とボランティアとは異なる。共同生活ができる成熟度が不可欠。
    - ・男性が 35 歳まで何かを成し遂げているのでなければ、それ以降は無理。
  - ・親の介護のために入会を迷っている人がいる。

#### ④自分の教区・修道会での年齢枠を超えた人を受け入れる場合、何が必要ですか

- ・入会前に一定期間の同伴と共同生活が必要。
  - ・入会までの見極めが重要である。
- ・原点に戻る。軸をしっかりと作る。
  - ・生き生きとしていること。
- ・識別の厳しさ、丁寧さ・・・
  - ・召命がないという場合に、家に帰すときの気持ちの強さ。
  - ・徹底的にイエスに従うという生き方を教える。
  - ・イエスに従うという気持ちがあるかどうかを、しっかり見極めること。それにより従順、離脱に生きられるように思う。



- ・年齢を重ねているからという理由で放任してはいけない。丁寧に関わって行くべき。
- ・養成チームが協力し合う。一緒に生活することも大切・種々の顔が見えるので。
- ・自分の本心を隠して入会する人がいる。識別を通して、その人の心に気づかせること。
- ・年齢枠を超えた人の養成プログラムを考えるべき。
  - ・祈りへの招き・念祷、黙想の重要性を体感させるプログラムが必要
  - ・妻と死別後、子育てが終わり、入会した人が居る。それによって会が豊かになったケースもある。この場合、養成プログラムは少し異なっていた。
- ・受け入れ側の自己変革が必要である。
  - ・共同体の高齢者との関わりが重要・自分たちに合わせるのではなく、入会希望者に聴くことが必要となる？覚悟があるか。
    - ・修道会が自分たちに都合のよいように入会志願者を取り扱うなら、彼女たちは去って行くことは必定。まず霊性を育て味わわせることが必要。
    - ・高齢者は若者が分からないので避ける、逃げる傾向を持つ。召命担当者に任せる。しかし高齢者には使命がある。若者に十分に応え得る。実際に関わることで自分たちが出来ることが分かってくる。同時に青年たちの心理が分かってくる。
  - ・修道会全体で入会希望者を受け入れ得るように、共同体のあり方を根本から見直す。
    - ・今はまだ、共同体全体で若者を受け入れようとする意識が欠けている。
    - ・養成者だけの問題ではない。
    - ・DVD から、共同体の一致、方向性の一致を求め、実際にチャレンジすること。
    - ・各支部の一人一人が、何が出来るかを考えること。
  - ・応受性・その時にその人が呼ばれたということを確認し受け止める力。
  - ・開かれた心・「年齢を重ねた人はいません」ではよくない。
  - ・アジアの貧しい国からの志願者を受け入れる場合、日本人は上からの態度とる。
    - ・アジアから来た若者の気持ちを受け入れるようにする事
    - ・高齢修道者は自分の価値観を押しつけ要する傾向が強い。これでは志願者は逃げて行く
- ・若い外国人養成者と年齢枠を超えた日本人入会希望者の関係・どちらにも成熟が必要。
- ・入会希望者と信頼関係を築くこと。その人の良い面を伸ばす養成が必要。
  - ・人それぞれ価値観が異なる・これは当たり前のこと。
  - ・物事を共に考える。同じ方向を向いて考えることから始めたらよい。
- ・養成者の深い思慮と力量が必要
- ・国際修練院
  - ・霊的な話は母国語がよい。国際性を育てるために国際修練の意味は大である。
  - ・若い人は国際修練院を楽しみにしている。多文化に慣れるので有益。
- ・声かけが大切
  - ・召命促進のためにはつねに声かけをして、種を蒔き続けることが大切。

#### ⑤年齢枠を超えた志願者をどのように募ったらよいでしょうか

- ・召命を募るとなると、相手が身構えるので、交流、関わりから召命の芽は育つのでは・・・
  - ・積極的な祈りの集いなどを通して。精神的に病んだ人が多く集まり、断るのが大変。
  - ・「召命のための集い」などを積極的に行い、召命促進活動を行なう。
    - ・召命黙想会とすると参加者が減るが、「祈りの集い」に「だれでもどうぞ」というと多く集まった。その中に若者も少なからずいた。
  - ・若い人と接点をもとめて、出向くことが必要。
- ・召命のための祈り、同伴の必要性
  - ・霊的同伴をしてもらっている人は、輝きが変わってくる。

- ・信徒の祈りによって、二人の若者がシスターになった。
- ・かつてシスターになりたかった人の孫が、その人の祈りによって、召命を考え始めた。
- ・観想会のシスターに祈りを頼んだら、3名の志願者が来たこともあった
- ・教区・修道会の協働体制
  - ・修道会は教区との結びつきを深めるべき。召命をもとめている人は多いはずである。召命を考える人に同伴できる養成者が必要である。
  - ・小教区でも若者に出会い、受け入れられるような姿勢でありたい。
- ・わざわざ年齢を重ねた人を募る必要はない。召命は頂くもの。
- ・自分の修道会の本質・理念を、自信を持って生きること。
  - ・若者たち、年齢を重ねた入会希望者は、修道会のメンバーあり方が明確であるときに、自分の立ち位置が分かる。立ち位置が分からない限り召命は生まれない。
  - ・修道者は自分の霊性を堅固に生きる事、そこに魅力が生まれてくる。
- ・大学でライフオリエンテーションを行い未洗礼者に種を蒔き、同伴して行く中に希望を感じる。

#### ⑥その他、気づいたこと、思ったことなど

- ・年齢枠よりも召命の識別の問題がより重要。どんな年齢の人に対しても、共同体に関わり、全員で召命を識別することが大切である。
- ・召命は自分が見えたときに育つもの。
- ・奉獻生活ではないか、奉獻したい人のために、高齢者ハウスをつくるのはどうか
- ・修道生活は共同体であるので、共同体精神が命に宿っていなければ意味がない。
- ・小さい子供が「司祭になりたい」という声に耳を傾けるべき。そのような声が聞こえる教会作りが急務。
- ・社会に開かれた教会を目指しながら、いつしか社会に呑み込まれた教会になっている。世俗化の危険に直面している。
- ・宣教者は外から来るのではない、自分たちの中から出すものである。召しだしの共同体性が必要。
- ・これまでしてきたことを裏付けられる話であったので力づけられた。
- ・シスター方はホリシーが堅固なので、入っていけないが、合わせながら学びたい。後継者問題は難しそうである。
- ・DVDを通して人も修道会も、時代に合わせて、変えられるべきということは分かったが、自分から出て行って関わることは少ない。
- ・教会の構造が変わらないと風は吹かない。
- ・外国人志願者を受け入れるとき、自国の文化を理解してもらえるように導くことが必要。
- ・現代の人は共同生活が出来ない。誰もが鍵つきの部屋に閉じこもっている。

2016年4月30日(土)

#### パネルディスカッション： 『召命の識別』

教区司祭養成：牧山強美師（日本カトリック神学院前院長）

男子修道会：住田省悟師(イエズス会元管区長・現修練院院長)

1975年入会、1984年3月司祭叙階、おもに教会使徒職の分野で活動。

2011年修練院に派遣され現在に至っている。修練者のいない修練長として、2年目を迎えた。

女子修道会：Sr.岩井慶子(聖心会)

1940年生、1966年初誓願、

教職、校長、大学学生寮、聖心会のローマ本部、日本管区管区長、初期養成担当など

司会：大山悟（日本カトリック神学院養成者・召命チーム）

- ①召命の現状、平均年齢など
- ②召命識別の視点（どのような視点を重視しているか）
- ③召命識別の難しさなど
- ④その他

#### \* 牧山強美師：教区神学生の養成の場における識別

- ・芝刈り神父と呼ばれている・芝をかることで芝の根は強くなる。神学生を識別し刈ることで神学生は真なるものとなるのではないか。
- ・識別の視点の多様性・
  - ・養成の責任者は司教・司教の意見、考えが異なると養成が多様となる。
  - ・教区神学院では、養成者は複数である。複眼で神学生を見ている。
- ・識別とは
  - ・神学生をより分けるためではなく、神学生を育てるために識別がなされる。神学生は評価されながら、その評価を通して自分を知り、自己養成を具体的にしていく。
  - ・識別は育てること、その学生の力を引き出すことである。
- ・識別は誰がするか
  - ・養成者、特に神学生自身(自己評価)、宣教・司牧実習先司祭と信徒、養成担当者、司教など。
- ・識別の視点
  - ・四つの次元でなされる・人間的、霊的、知的、宣教司牧的次元
  - ・神学生の経験、年齢、能力を前提にして、それらを延ばすことが大切。
- ・識別におけるトラブル
  - ・評価、識別に対して反発する学生がいる・その場合も丁寧に聞き、養成者団はそのように見ていることを冷静に告げる。
  - ・よく見てくれる養成者、甘い養成者を良い養成者として、その養成者に従おうとする。それゆえに養成者の神学生についての識別が甘くなったり偏ったり主観的になりやすい。
- ・霊的同伴者と聴罪司祭
  - ・スルピス会は同伴者と聴罪司祭が同一の司祭。その神学生の表裏の全存在を引き受ける。
  - ・神学生は聞いて欲しい。認め愛し肯定して欲しい。それゆえに霊的同伴の時に長く話したい。

#### \* 住田省悟師：男子修道会(イエズス会)における識別

- ・召命の現状・日本管区においては近年召命の減少がある。この2年入会は0。  
アジア管区においては1970年に三万 → 2015年18000・大幅減  
召命の増加地域・アフリカ、ベトナムなど  
召命の横ばいと減少・フィリピン、中国、韓国など
- ・養成の特徴
  - ・イエズス会ではフィリピンに合同修練所を作り、三年間二人ずつ送り込む。修練長も合流する。
    - ・司祭が高齢化し召命も減少しているから、養成の分野に適当数の養成者を送れない現状がある。
    - ・合同修練の結果
      - ・人数が少ないと修練者と修練長の関係が密になり、修練が甘くなったり、お互いに気兼ねしたりするので、豊かな養成ができない。
      - ・合同修練になると修練者が複数になるので、お互いに刺激になるし、日本人にとっては英語で話す機会を得る。修練者は説教、分かち合いなども英語でするので、色々な視点で有益となる。
- ・召命の識別に関して
  - ・養成チーム(四人)
    - ・召命促進のために定期的ミーティング、黙想、研修会などを企画している。また修練者の識別なども行う。
    - ・養成チームは複数なので、複数の視点から識別はなされ、識別が豊かになる。
  - ・召命識別の視点
    - ・神から呼ばれているという意識を持っているか。
      - ・自分が望むのみならず、神との対話を通して、神の声が心の中で響いているか。
      - ・他者、他の物事を通して働く神の声を聴けているか
    - ・共同体を通して働かれる神への信仰を持っているか。
      - ・共同体の具体的関わりの中で、信仰を育んでいるか。
      - ・共同体の他者に心を開き、他者との関わりの中に神の御旨を読み取っているか。

- ・自分の弱さ、醜さなどをさらしながら、また他者の弱さ、欠点などを受け止めながら、神への信頼を深めて行っているか。
- ・神の呼びかけに応える意識を持っているか
  - ・召命は回心の側面を持つ。回心の連続を通して、神との関わりが親密になっていく。神の招きに応えるという不断の意識が召命を实らせるので、神の呼びかけに応えるという意識を強い意識を持っているか。
- ・識別の難しさ
  - ・召命は不確定要素である。自分の意識にせよ、他者からの判断にせよ、确实、不変に召命があるとは判断されがたい。それゆえに識別は容易ではない。
  - ・召命は本人が幸せであることに関わる。一緒賢明に召命に応えようとして努力し、耐えている。それは自己実現のためか、あるいは本当の幸せのためか、分かりがたい。
  - ・召命は神の御心に自分を合わせていくことである。しかししばしば自己実現が目標となり、そのために努力している場合がある。修道会の上長から自分の望みを異なる任命を受けたときに素直に「はい」といえなければならないが、志願者、修練者にその意識が育っているかが問題となる。
  - ・召命の識別のためには、複数の人による識別が不可欠。種々の視点から志願者、修練者に関わり、その総合的視点から判断されるべき。従って修練長一人で識別をすると、その識別が偏り志願者、修練者の良い面が見過ごされる場合がある。
  - ・年齢枠を超えた人の識別は容易ではない。すでに自分なりの価値観と人間性ができあがっているので、他者に合わせていくことは容易ではない。成長すべき伸び代が狭い。
    - ・年齢を重ねた人の召命を識別する視点として、その人「今すぐ」「どこにでも」「派遣できるか」という視点で行っている。十全な成熟と使徒職への可能性が識別基準となる。
- ・召命養成チームが大切にしていること
  - ・召命は変えられていくプロセス・回心の道である。この変えられていくプロセスに自分を合わせ得る人が召命の道を歩む人である。
  - ・召命は天から降って来るものではなく、共同体の地平から出てくるもの。この世界に働く神からのものである。それゆえ家庭、小教区共同体、修道会共同体が重要となる。
  - ・イエズス会内への啓蒙・会全体で、共同体全体で召命を育てる意識を持つように呼びかけている。

#### \* Sr. 岩井慶子(聖心会)：女子修道会における召命と識別

- ・入会を断るケースがある。
  - ・入会希望者が神に惹かれ、極めて有能であるが、共同生活ができない、会の方針に従順に生きる事ができないと判断されるとき、「あなたを養成できる人がいませんので・・・」と断ることがある。
- ・養成の難しさ
  - ・入会希望者の中には、それまで自分で経済的にも自立し、自分の人生に責任を持って生活してきたし、社会でもそれなりの評価を受け、責任も果たしてきた人がある。そのような人の場合、自分の価値観の中で納得出来ないことを言われたり、否定、批判されたりすると怒り、落ち込み、病気になる人がいる。
- ・入会前体験生活の重要性
  - ・志願期以前に、共同体体験を通して、自分の召命の進路を、ほぼ決め方が良いのではないかと思う。
- ・年齢枠を超えた人、あるいは年齢枠内での入会希望者に共通するもの。
  - ・既婚経験者であっても、自分に固執することなく、全てを手放しながら、修道生活に入れる人もいる。信仰、希望、愛、柔和、謙遜、清貧、従順、自己放棄の精神、奉仕の精神などほどの年齢層にも共通して求められる要素である。
  - ・既婚経験者であっても、深い信仰と豊かな感性を持っている人がいる。
- ・世代間ギャップ
  - ・目上の人には「です」「ます」調で話していても、同世代の人には、「それじゃ駄目じゃん」などと砕けた口調で話している。聞く側も「あ、そうか」と素直に受けている。やはり上限関係のみならず、同世代の人がいた方が、素直になれるような気がする。

- ・合同修練の大切さ
  - ・同世代の人と話すことができるし、他の修道会の姉妹と連絡取り合い、霊性や人間関係を深めることができる。隣の芝生はよく見えるので、素直になれる面もある。
  - ・合同修練ができるように、それぞれの修道会が、知恵を出し合い、協力しあうことが必要。
- ・自分の修道会の存在意味を確認すること
  - ・自分の会の意味が分からないなら、会は存続できない。会の存在の意味を共通理解し、その存在意味を具体的に生きていけるように、会員全員でよく話し合うべきである。
  - ・自分たちが直面する諸問題を全員で知恵を出し合いながら話せることが大切。
  - ・入会希望者に関しても、みんな受け入れ、多くの視点から識別するほうが良い。
- ・召命は応えるもの
  - ・自分の望みで得られるものではない。どこからか与えられるもの。与えられるものに応えようとする所に召命は実現する。
- ・識別は多次元で、多様な視点からなされるもの
  - ・どのように召命が与えられるか、そのきっかけは多様。たとえ人生逃避であっても、余生を考えてであっても、入会希望者が開かれた心、柔軟な心を持ち、共同体が受け入れるために成熟しているなら実る可能性がある。
- ・召命の促進のために
  - ・洗礼が増えなければ司祭・修道者の召命は増えない。教会共同体が霊的に豊かにならないなら、召命は増えない。
  - ・司祭たちは教会の中で存在感がある。司祭がいなければミサも赦しの秘跡もなくなるから。しかし修道者の場合は存在感がない。だから召命促進は容易ではない。
  - ・今の時代に修道者の存在感があらわになるなら、召命が大いに芽生える希望はある。それは霊性が豊かになること、人々を癒し力づけることが出来る者となることではないか。
  - ・司祭も修道者も主に「生かされている」存在である。しかし主に生かされるという感覚は感じないものである。復活した主が共に居て下さる。聖霊が共にいて下さる。それは頭では分かるが感じない。しかし感じないのが当然である。神の霊は霊的・力としてその人の中にあるから。力そのものは感じない。力は発揮された時に、力があることが認識される。自分の中にある神の力は感じられないが、愛、ゆるし、正義、へいわ、奉仕などとなって、私から外に具体的なわざとなって現れるとき、感じられるものである。それゆえ自分の中にある「生かす力」「神の存在」を観想し「観じる」ことを繰り返しながら、それが具体的に「感じられる」ようになることが大切であろう。司祭・修道者はこのように「生かされて」生きていることを、社会の中で具体的に示し、感じ取らせる存在である。ここに司祭、修道者の存在の意味と価値があるのではないか。

## 『召命の識別について』の分かち合い

### 1. 召命の識別の重要であるか

- ・識別が曖昧な場合・
  - ・変な誤解を生む。周囲の人への影響が大きい。共同体を壊す。信者に迷惑がかかる。
  - ・互いに(本人も修道会も)不幸になる。笑顔がなく、一生不幸になる。喜びが見いだせない。生活が福音的、共同体的でなくなる。
  - ・仮面をかぶった人間となる。人格的、心理的欠点を見落とす。
  - ・最終的には命を失うことになる。
  - ・会のカリスマが見えなくなる。その人が会のカリスマを殺す。
  - ・養成中に崩れてしまい大変なことになる。最期まで召命を生きることができなくなる。
  - ・いろいろな教区や修道会を渡り歩くようになる。
  - ・神の国に影響する。
  - ・会に相応しくない会員を抱えてしまい、出さずに出せない問題となる場合がある。
  - ・時間をいたずらに使い、本人も会も傷を負う。召命の識別は厳格に早めに行うことが大切。識別がきちんとなされるとき、他の志願者たちも引き締まる。

- ・何を識別するか
  - ・本当に召命をいただいているかの識別。ここに相応しいかどうかを識別する。召命が本物か。修道会の召命なのかどうか
  - ・早い段階に状況を見極めることが必要。識別の透明性が必要。
  - ・召命の原点(動機・きっかけ)を問う識別が必要。心の傷は後の生活に影響する。
  - ・自分が愛されて育ったかを、入会時に、また養成の段階で識別することは重要。
    - ・愛されていない場合には、後で種々の問題(アイデンティティの欠如、攻撃心・反抗心、過度の依存心、甘え、自閉性、羨望、高慢、居丈高など)となって吹き出してくる。
  - ・入会希望者にとって何が、どこが一番幸せになるのかを、時間をかけて見分ける。
    - ・識別は本人にとって何が一番幸せになるのかを見分けること。それゆえに入会希望者と共に入会希望者の心の奥にある望みを露わにしていく作業である。
  - ・自分の会でなければ、というのではなく、目の前の人に対する神の望みを正しく見極めること。
- ・識別者に求められること
  - ・霊的同伴者は養成にどのように関わるのか。霊的同伴者との信頼関係が不可欠。
  - ・公平さ、女性の養成担当が必要
  - ・識別と評価の基準を明確にする・精神疾患者を性格に把握できること。
  - ・その識別が歪むのは・識別者が神に十分に聴けない時。被識別者の能力を過度に信じる時。過度の期待があるとき。受け入れられたいと思っているとき。面倒が嫌と思う時。
  - ・客観的識別のために現場の複数の目と声が必要。
  - ・感性豊かさが必要。
  - ・入会希望者の人間性と高い能力に惹かれ、会に必要な人材とみてしまうことに伴う危険性がある。
  - ・召命が「何か違う」と直感したら、複数の意見を求めつつも、本人に伝える勇気と厳しさが必要。
  - ・識別を行う養成者は、その識別が客観、公正であるためにも、自分を見つめ、知ること。霊的深さを保つことが必要。

## 2. 召命の識別の視点は何か

### ①信仰の資質はあるか

- ・神との関わりがないと後につながらない。神とのペルソナ的関わりが大切。霊的同伴が重要となる。
- ・神との出会いの資質があること。神との関わりは次第に深められるもの。
- ・神との出会いの中で自分の体験を見つめること
- ・神との信頼関係.神について行きたい。
- ・イエスに惚れ込むこと。神に呼ばれていると感じること。
- ・神の望みにいきる。
- ・ケノーシスのキリストに従うか
- ・ミサ聖祭におけるキリストの現存を意識しているか
- ・神に祈っているか
- ・若者たちは情報量が多いため、頭で考え、内面におりていかない面もある。
- ・召命の識別の視点か、つねに神から頂いている。ゆえに今日神から頂く視点でものごとを見ること。

### ②自己のアイデンティティの形成の資質はあるか

- ・現代社会の中でバランスのとれた人間を育てるのは大変
- ・自分の心傷をみとめ癒やして頂きたいという気持ちを持つこと。
  - ・傷があると自己開示できない。コミュニケーションが取れない。
  - ・傷があってもよい働きをする人がいる。カウンセラーによる癒やしが必要。
- ・十分に愛されたか、正直であるか、情熱があるかの3つがあれば召命は開花する。
  - ・家庭の環境は本人の育ちのために重要な要素。
  - ・愛情を受けていない入会志願者が多い。その場合、共同体全体でその人を受け止め、愛し、自立させていく作業が必要となる。ただし多くの課題が出てくると予想される。
  - ・偏った愛、甘やかされて育った人は、他者からの批判や注意に弱く、深く傷つき、へこんでしまう。
- ・自分の現実を見つめ得ること。
- ・周りの人との関わり方、関わろうとする気持ちがあるかどうか

- ・自分周囲の人の喜びになっているか
- ・多くの若者が、物事を自分で判断し決定できない人が多い。

### ③ 自分認識力への資質があるか

- ・何故その修道会に入りたいのかという、強い認識が必要。

### ④ 自己開示力の資質があるか

- ・他者による評価を聴けるか
- ・現会員の手本が必要であるが・・・難しい

### ⑤ 人間関係力の資質があるか

- ・リスクを恐れずに、取ることのできる剛毅力を持つか
- ・共同体や他者との協働、協調ができるか・・・養成プログラムに掃除を入れてはどうか。
- ・教会共同体の関わりができるか。信徒間の交わりができるか。

### ⑥ その他

- ・修道会を愛する心
- ・心身が健康であること
- ・精神的病を抱えた人のために、専門家が関わることも重要
- ・自分が変わろうとする心が大切。他人を責めない、他人が変わることでなく自分が変わることを。

## 3. 識別には段階（展開）がある

- ・入会前が最も大切
- ・神学院に入る前に識別を堅固に行うべき。神学院はこの人は駄目だとはいってくれない。識別が甘い。
- ・種々の段階を経て、識別が深まり、最終的には神の宣教者となる。

## 4. 識別の次元・・・特に重視する次元があるか

- ・チーム内での意見の一致が大切
- ・一人で判断するのは望ましくない。

## 5. 識別の検証

- ・一人でするものではなく、チームとして行うべきもの。客観性を保てるため。
- ・識別は共同体生活を通して行われるものべある。その共同体の人間的、霊的深さや広がりや識別を客観的なものとするのではないか。

## 6. その他、召命の識別に関しての意見

- ・識別と評価はことなる。
  - ・識別は具体的にどのように考え、どのように行っているか行為の背景プロセスを問う。
  - ・評価はその行った行為がどうであるかを問う。
- ・年齢にあわせた養成ができるか
- ・信徒には召命の為に祈る使命がある。
- ・司祭、修道者の存在が神に依る癒やし、人々の憩い、安息の地になっている。
- ・精神的な病気などの見極めが大切である。
  - ・精神的に病気を持つ人が、入会を希望するケースが多くなっている現実にあって、その対応は容易ではない。ある会ではカウンセラーとのつながりを持たせ、問題を抱えていた人が自己認識を深め、自己の癒しを行い、問題を抱えている他の人を専門医につなげていくピアカウンセラーの役目を果たすまでになったケースもある。

第3回「召命担当者の集い」《年齢枠を越えた人たちの召命》 2016年4月29-30日  
アンケート

①今回の集いから得たものがありますか。それは何ですか。

- ・教会法は救いの為にある。
- ・教会法の観点から見た召命。未信者時代の結婚、離婚、その後の司祭、修道者になる手続きの説明などが為になった。
- ・新しい召命を受け入れるために、共同体が変わる必要がある。そのために何ができるかを、共同体メンバーで話しあう時である。
- ・召命についての視点の多様さを頂いた。
- ・DVDとSr.松宮の分かち合い。共同体が実際にどう変わっていくのか為になった。
- ・初日のDVDとSr.松宮の話、田中師の話に気づきを得た。2日目のパネルディスカッションはとても役に立った。
- ・カルメル会再生のDVDから、共同体を刷新していくことの大切さに気づいた。祈りを深め、温かい喜びの共同体づくりが必要
- ・DVDは召命、信仰の原点を教えてくれた。
- ・召命が減少しても、修道生活の現実にも多くの困難があっても、「私を生かす力」があるというイエスへの信仰と愛に信頼し生きて行くことの大切さ。
- ・主への信頼、希望をますます深めることの大切さ。
- ・養成担当者の苦勞を分かち合えた。問題解決のヒントを得た。
- ・養成担当のシスターの苦勞が分かった。祈り、識別の重要性が分かった。召命には年齢は関係ないと思えた。
- ・召命は、共同体および修道会の問題であると気づかされた。
- ・召命担当者としての識別
- ・いろんな修道会の現状を知ることができた。
- ・誰でも、どこでも行ける修道院を作る必要を感じた。誰もが召命養成者という意識を持つべき。

②年齢枠を越えた人たちの召命にはどんな豊かさがありますか。

- ・お互いの相違を認め、良さを共有し、開かれた心を持たせてくれるのでは
- ・神のためにすべてを捧げて生きる仲間が増えることは楽しい。
- ・彼、彼女が持つ経験。今の世界、社会の中での動きを知っているのでは、貢献してくれるのでは。
- ・多様性の豊かさ。相手のあるがままを受け入れる寛大さ。
- ・経験、受け入れ器の大きさ。
- ・多様な人生経験が入ってくるので、視野が広がる。視野の広さ、人間的成熟、人生経験豊かさ
- ・会のカリスマが豊かになる
- ・人間的成熟がある。知的情緒的安定性がある。技術的能力がある。
- ・人生社会経験をj得て、忍耐を持ち、自分を他者にゆずることが若者よりも容易であること。
- ・物事を落ち着いて、深く眺めることができること。
- ・新しい視点をくれる。共同体の枠、幅を広げる。
- ・厳しい回心の道を歩んでいる人がいる。
- ・「その人を受け入れる」という思いを大切にすると、修道会、共同体は成長するのではないか。

③年齢枠を超えた人の召命を考える時、特に何が問題となりそうですか。

- ・過去の生活への固執と自分より若い人に聴き合わせることの難しさ。
- ・動機。健康。養成。
- ・自分、我をどれだけ落とせるか。自己放棄の精神。これまで築いてきたものを手放しできるか。
- ・心の柔軟性があるかどうか。共同生活への適応。従順でありえるか。
- ・凝り固まった考え方。プライドがあり謙虚さに欠ける。
- ・人間的に成熟しても、人間的に性格が固まってしまう、新しい環境や生き方に順応できない。
- ・体力低下、キャリア、考え方などが邪魔になる。



- ・時間が限られている。識別および養成に時間をかけられない。内面は成長できるが肉体的には限界がある。
- ・自分より年齢が下である者、あるいは能力が低い者への尊敬を欠いたり、謙遜にその者たちとつきあうのが難しい。

**④年齢枠を超えた人の召命を受け入れる場合、特に何に留意しながら育てたいですか。**

- ・今までのやり方を押しつけないこと。
- ・受け入れは慎重に。養成の基本は年齢によって代わるものではない。
- ・その人をその人として受け止めたい。その人に働く神に、耳を傾けたい。
- ・コミュニケーション。相手の抱える困難や喜びを引き出すこと。同伴して理解しあう。
- ・本人も受け入れ側も、年齢差を感じさせないようにするべきでは、兄弟姉妹として受け入れえるために、心を開くこと。
- ・年齢を重ねていても、修道生活の初心者であるから、大人だからと突き放すのではなく、相手の不安に気づくように配慮する。
- ・今までの人生経験を活かす養成ができれば素晴らしい。
- ・柔和、謙遜な人間へと成熟する素質があるなら受け入れてよい。養成者に心を開き、透明になることが出来ない場合には受け入れは難しい。神と人に自分を委ねる心は信仰の要であり、奉献生活の土台である。
- ・その人の信仰、価値観、ものの見方、考え方を大切にしながら添いたい。
- ・本人の意欲を大切に
- ・その人の良さを壊さないように、神との関わりに導きたい。愛されていることへの気づき、正直であること、イエスへの情熱を育てたい。
- ・健康を保たせ、自分に正直になれるように。弱い自分を認め、さらすことができるように、今までの自分を整理できるように。
- ・その人の良さを認めること。その人を愛すること、知ること。共同体全員が養成者であるとかく自覚を持つこと。

**⑤その他、あなたの今の思い、気づき、望みなどをお聞かせ下さい。**

- ・小教区におけるミサは誰でも参加できるものであるはず。
- ・司祭、修道者の養成の徹底をはかるべき。
- ・司祭、修道者の生活の保障がなされるべき。
- ・養成担当の最終責任者に、その適性がないとき苦しい。
- ・フロアから直接に意見を聞く質問の場があるとよかったのでは。
- ・具体的な話があり為になった。
- ・年齢に関係なく、養成者は、志願者、入会希望者に「きちんと向き会ってほしい」。「年齢が高いのだからわかるでしょう」では・・・分からないことが沢山ある。だから教えて欲しいし、共に考えて欲しい。志願者は精一杯応えたいと考え努力しているのですから。
- ・養成について、会全体の意識が薄い。担当者以外は養成に対して他人事。
- ・新参の養成者として、自己養成の重要性を実感した。養成所、養成のあり方について考えて行きたい。
- ・主への信頼、信仰に賭けていきたい。
- ・他の会との情報交換を行う
- ・2日目は昼食前に終わるようにしていただけたら。
- ・教会、司祭、シスターが社会から不要と思われる、ということはショック